

その57 最後に引き継ぐ者の務め

昨今「墓じまい」を行う人が徐々に増えています。

高齢になると、お墓の維持管理が難しくなり、子どもに任せるようになりますが、子どもが都会に出て実家に帰る予定がないとなると、これもまた定期的な維持管理ができなくなります。また生涯独身で子どもがいないという人も、お墓の行く末について考えてゆかねばならないでしょう。

管理が行き届かず放置されたお墓は、草木が生い茂ったり、墓石が崩れかけたりと、目に余るものがあります。また見た目が悪いだけでなく、それまでお墓を維持してきたご先祖様やお寺、周辺の方々にも大変迷惑をかけることにもなりかねません。「墓じまい」と聞くと、ネガティブなイメージがあるかもしれませんが、正しい「墓じまい」をすることがお墓の管理を最後に引き継いだ者の務めではないかと思うのです。

さて「墓じまい」で気をつけたいことですが、まずは親族間でよく話し合うことです。そして、お墓に関係する人には「墓じまい」をすることを知らせておきたいものです。たまたまお墓参りに訪れたところ、お墓がすでに無かったでは、訪れた人も気分の良いものではありません。

その後の「墓じまい」は次のように進めます。①菩提寺と相談し、お骨の移転先を決める ②市役所環境課で『改葬届』を提出し『改葬許可証』を受け取る ③墓石の解体を石材店に依頼する ④閉眼供養をして遺骨を取り出す ⑤新しい受け入れ先で『改葬許可証』を提出し、お骨を供養する ⑥石材店で墓石を解体撤去してもらう ⑦借りている墓地の場合は返還する

※改葬届の申請については、お墓が飛騨市以外にある場合、お墓の所在地の自治体へお問い合わせください。

その58 大切なのは家族での話し合い

親の終活はどのように進めたらよいのか？という疑問や心配を持つ人は案外多いのではないのでしょうか。

親も元気であれば、自分の力で終活を進めることができるのですが、歳を重ねるにつれ体力や判断力が衰えてくると、出来なくなる可能性が高いのです。

親に終活を始めてほしい場合、ただ単に「終活してほしい」と言うのではなく、お正月やお盆など家族が集う時を利用して、まずは家族で将来について話し合うことが大切です。準備すべき事柄としては、最初にエンディングノートを書いてもらいましょう。この時ただ「書いて」と言うだけでなく、その中には家族との意思疎通を図っておくべき項目も多いので、お互いに確認しあいながら書いてもらいましょう。

それからこの時に財産管理についても情報を共有しておきたいものです。親が病気やケガなどで判断能力が低下した場合、金融機関口座の財産管理などは出来なくなる恐れがあるからです。

また相続に関するトラブルを避けるため、遺言書を書くことについても話し合っておくと安心です。

そのほか、自宅の物品整理や片付けも、親と一緒に少しずつ行っておくことをおすすめします。時には、捨てる捨てないで揉める事もあるかもしれませんが、無理強いせず、今は捨てられなくても、その物の行く末はどうしたいのかという希望だけでも聞いておくことが大切です。

終活は非常にデリケートな部分もあるので、なかなか話しにくいものですが、話すことをためらってばかりいると、時に問題を大きくしてしまうということもあります。

終活を行う年齢に決まりはありません。早め早めに家族で話し合っていくことが大切です。